詞と辞の接続における意味的関係（要旨）

山崎良幸

詞と辞の区別は、言語を過程的表現と見る言語過程説の立論の必然的な歸結としてもたらされたものであるが、同時にそれは、言語過程説における新しい文法体系の最も根本的な命題であるともいうことができるであろう。言語過程説においては、言語におけるわれわれの具体的な思想の表現は、常に詞と辞の結びつきによってなされると考えられているのであるが、その場合意味的には、辞が詞を包むというようなかたちにおいてなされるものとして説明されたのである。ところでその場合、詞と辞の結合は任意になされるものであるかどうかというに、ある種の助動詞においては、詞と接続する場合、詞の意味内容によってその接続関係が制約をうけるということが考えられるのである。

従来完了の助動詞の名によってよばれて来た「ぬ」「つ」の二つの辞は、その表現性が対立的であると考えられて来たようであるが、若しそうだとすると、この問題を考えるのに極めて好都合なことになるのである。即ちこの二つの辞の表現性の上に見られる対応関係が、上の詞の意味内容との関連において、その接続の上に何らかの反応をあらわすに違いないからである。

そこで私は源氏物語全体から「ぬ」「つ」をすべて抽出して、この二つの辞と上の語との接続関係について検討してみたいのである。ところがある幾つかの語は、その用例が数百例に達する中で、すべて「ぬ」にのみ接続して「つ」には接続せず、又ある幾つかの語は、その用例すべて「つ」にのみ接続して「ぬ」には接続していないのである。これは「ぬ」「つ」の表現性の上に見られる対応性と、上の語との間に相互依存の関係が考えられねばならぬことを示唆するものと思われるのである。そこで更に、源氏の中で「ぬ」に接続する回数が十回以上、「つ」に接続する回数が五回以上（源氏における「ぬ」「つ」の用例数の割合は大体2:1になっている）のものを抽出して、それらが「ぬ」「つ」と接続する際における関係を考察してみたのである。しかしてそこから、意味の上である性格をもつ詞は一般に「ぬ」に接続し、他の性格をもつ詞は一般に「つ」に接續するという事実を確認することができたのである。もとよりこれは源氏物語の用例だけに限って見られる現象ではなく、一般に認められる現象なのである。

要するにある種の辞においては、それが詞と接続する場合、詞の意味内容によって制約をうけるということが考えられるのである。このことは一般に、詞と辞の接続における意味的関係を考える上に重要な示唆を与えてくれるものと思われるのである。

——高知女子大学教授——